



「水面下に思いを馳せて——篠尾池」

上坂佳子(関屋)

私達、人間にとって“水”はなぜか安心感をもたらしてくれます。水がなければ私達は生きてゆくことはできません。また、からだの大部分は水からできているからなのでしょう。今回は、水ということを中心にテーマにして、いにしえの人の暮らし、そして土地の名に考えを馳せてみました。

今、私達の暮らしは日進月歩しています。しかし、地名はありのままの姿を残しています。地名は古代の語源をありのままに伝えているといったのは、徳川時代の学者新井白石でした。私の住んでいる「関屋」は大和と河内を結ぶ関所があったことに由来するといわれています。近鉄関屋駅のあたりは、今から二十五年前くらい前から大がかりな住宅がつけられ始め、小高い丘が、新しい町になりました。駅の北側の閑静な住宅地に足を踏み入れていきましよう。過去は美化されるといいますが、少し昔にかえってみると……。関屋のあたりは、たくさんのお芋畑があったそうです。地が肥えていなかったため米づくりにあまり適していなかったのですが、それが、さつまいもには最適であったようです。関屋芋として、手車に芋をのせて深夜に若い衆は大坂の焼芋屋にもっていき、大変人気があったようです。今や美しい街並みになっ

しまった中に、篠尾池をみる事ができます。遠くからこの池をゆつくりと眺めてみましょう。手を広げたようにみえます。香芝市内では一番大きな池で、市内は勿論、上牧方面でも灌漑用水に用いられています。面積六・六ヘクタール、周囲約二キロメートルのこの池は、聖徳太子の築造と伝えられています。法隆寺の記録によると元来、この池の近くは、水不足のために米がとれなかったといわれています。農民たちの困惑に心を悩ませた太子は、推古天皇十五(五六九年)年に一夜のうちに掘られたといわれています。この池の水の恩恵はいかばかりかはかりきれないものがあります。聖徳太子の徳を偲んで春には香芝市では水米を奉納し、会式に参拝するといわれています。生物にとつての水の存在の重要性を痛感せずにはおれません。毎年の岳登りの四月十三日には、法隆寺から来られた僧侶と、関係者の方々とで、安全祈願が行われています。この池ができたことにより水田開発が、飛躍的にすすめられたことはいまでもないことでしょうか。インターネットにも「この池の風景は素晴らしい」とあるように、桜や柳の木々が水辺に張り出し、憩いの風景を醸し出しています。池の南側へまわってみましょう。遊歩道がつくられています。

池辺を散策すると、雑念を払い無の境地にさせてくれます。私達が今あるのは過去の営みがあるからだということを決して忘れてはならないのです。この地に人が住みはじめてから今日に至るまでのあいだにさまざまな人々の流動・変遷があったことなのでしょう。そして、人々の生きたあかしのひとつがこの篠尾池なのです。今日もまた、池から真赤に映える二上山を眺めにきました。この他にも水に関する言い伝えはたくさんあるでしょう。このことは水の少ない土地柄をあらわしていると思います。それだけに水への感謝の気持ちは強かったと考えます。また、反対にこうした水に関する昔話があるのは水がそれだけ大切なものであり、人々にとつて生活していくうえで死活にかかわる問題だったからでしょう。「ふたかみやま」として崇められた二上山。旧石器文化を生み出した石、サヌカイト。二上山麓に香芝市が誕生して十年が過ぎようとしています。京阪神のベッドタウンとして、新しい街として発展している香芝市ですが、ふるさと「やまと」の顔を忘れては今後の繁栄をみることはできないと思います。これからの香芝市の歴史を築いていくのは私達市民一人一人なのです。